ワークショップ４

検診医・所長として献血者を増やす

中川國利（宮城県赤十字血液センター）

はじめに

少子高齢社会の進展に伴い，若年層を中心に献血者の減少が著しい。そこで検診医・所長の立場から，若年層の献血者確保に努めている。

Ⅰ．検診医の立場から（図１）

献血者には敬意と感謝の念を持って接し，以下の対応をした（具体的会話：献血に来ていただき，誠に有り難うございます）。そして献血が崇高なボランティアであることを強調し（あなたの血液で助かる命があります），献血者減少をグラフで説明した（全国の献血者は30年前870万人でしたが，現在は473万人です）。また血液に使用期間があることを説明し，献血が常に必要であることを強調した（赤血球21日，血小板４日と短期間です）。さらには献血による利点を説明した（学校健診では血液検査をしませんが，献血すると貧血，糖尿病，高脂血症，感染症など，17,000円ほどの検査結果が無料で分かります。また貧血では食事指導や，鉄剤のサプリメントも紹介しています）。なお緊張を和らげるために個人的なジョークを語った（一生付き合える友達の見分け方を伝授しましょう。それは「献血に行こう」と誘って，「いいね」と快諾する友は，君のように良い性格です）。

図１　検診合間の街頭呼びかけ

積極的に話しかけることにより，多くの献血者が笑顔となり，献血する理由までも語ってくれた（白血病となった友人が，多くの人の血液で元気になったから）（私の出産時に母が大出血し，輸血で助かったから）（学校ではダメな私でも，感謝されるため）（震災で受けた援助に対して，感謝を込めて）。そして多くの献血者が再来し，（貧血がどれだけ改善したかを確認するため）（親友を連れてきました）（癒しを求めて）（先生に会いたくて！）と語り，私自身も検診業務に充実感を覚える。

Ⅱ．所長の立場から

１．献血出前セミナー（図２）

小中高大学校に直接出かけ，献血啓発セミナーとして「血液の働き」や「献血から輸血までの血液の流れ」を紹介した。また輸血の具体例として，DVD『アンパンマンのエキス』を上映した。さらには学校側の要望に応じ，「健康講話」「将来の夢」「模擬外科手術」など，学生の年齢や関心事項を考慮して講演した。また終了後には小学生582名，中学生529名，高校生835名，および医学生297名，教育学部生を240名の計2,483名に，無記名のアンケート調査を行った。

アンケート調査では，全生徒の84.5％が分かりやすいセミナーと答え，89.8％が献血に関心を示し，また84.1％が献血に協力したいと答え，献血に対する理解が深まった（**図３**）。さらに感想文には，献血に対する関心を持ち，献血に協力したいとの意見が大多数を占めた。また小中高校生では医療職に興味を抱く意見や，医学生では将来の医師としての役割を自覚する内容も記載されていた。

具体的に献血に結びついた例としては，セミナー後に献血ルームに友人と連れ立って献血に訪れ

（1）　河北新報　第2朝刊　平成27年（2015年）2月8日（日曜日）©河北新報社 2015

週刊 わぽピョン こども新聞

KODOMO SHINBUN No.176 KAHO PEPPE

献血って大事なんだね!

手術の道具、はじめてさわったね。

学んだよ、命と血液の大切さ

宮城県涌谷町小里小

大人になったらできること

「アンパンマンのエキス」って、分かりますか？　14年前に神戸市の病院（びょういん）で亡（な）くなった4歳の男の子、りょうすけくんが「血液（けつえき）」をこう呼（よ）びました。パパ、じょうにがんのため、りょうすけくんは体の血（ち）をつくる力をなくし、50回も輸血（ゆけつ）をしました。「アンパンマンが病気（びょうき）をやっつける」と信じ、がんと闘（たたか）ったのです。

宮城県赤十字（せきじゅうじ）血液センターの所長（しょちょう）、中川国利先生（63）がこのほど同県涌谷町（わくやちょう）の小里小を訪（たず）ね、りょうすけくんの話を通して、血液を必要（ひつよう）としている人たちが全国におおぜいいることを話しました。

人から血を分けてもらう「献血（けんけつ）」でまかなわれます。その活動を担（にな）い、病院に血液を届（とど）けるのが赤十字血液センターです。「でも、献血してくれる人が少なく、血液はいつも足りない。宮城など東北は特に少ない。みんなも大きくなったら、病気の人を助けてください」

中川先生は涌谷町の生まれで、外科医（げかい）として27年間、胃（い）など消化器（しょうかき）の病気の手術（しゅじゅつ）を手がけてきました。いま、各地の小学校を訪ねて話をしています。

「みんなの夢（ゆめ）は何？」と、中川先生が58人の児童（じどう）に聞きました。「サッカー選手（せんしゅ）」「学校の先生」「野球の選手」など、いろんな答えが返りました。先生は、「まず本を読んで、そして、「おうちの仕事（しごと）を手伝（てつだ）おう。きっと、いいことがあるよ」。

中川先生が子どものころ、うちで手伝（てつだ）ったのが、カキの皮（かわ）むき。「1日に300個くらいむいた。すると、手が器用（きよう）になった。手術をする外科医になるのに役立ったんだよ」

5年の浅野太努（ひろむ）くん（11）、6年の大谷遼（はるか）くん（12）が「りょうすけくんを知り、命（いのち）の大切さを考えた」「本もたくさん読みます」と感想（かんそう）を話しました。

実際（じっさい）の手術で使う内視鏡（ないしきょう）などの道具がならべられ、みんなは手にして動かしてみました。この中から、将来（しょうらい）の天才（てんさい）外科医が生まれるかな？

図２　地元新聞に掲載

た高校生や大学生，また親子で献血バスを訪れ，母親が献血する様子を興味深く観察した小学４年生が存在した。医学生においてはセミナー後に行われた体験学習で献血ルームを訪れ，路上で献血呼びかけをしてくれた。さらには期間不足やＢ型肝炎ワクチン接種直後で献血できない学生も存在したが，194名中111名が献血受付し，うち血色素不足や低体重などを除く83名が献血に協力した。

２．メディアでの献血推進

少子高齢社会の進展に伴う若年層を中心とした献血者減少，また検診業務を介して傾聴し得た献血者それぞれの想いなどを，新聞や医師会報などのメディアで紹介した。地元新聞の掲載を契機に宮城県教育長から面談の申し出を受け，すべての県立高等学校長へ献血推進のメッセージを出していただいた。

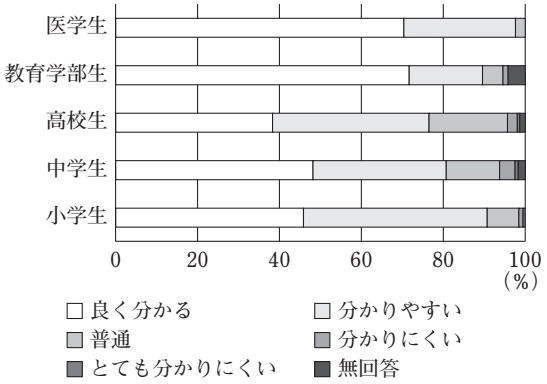
また仙台市医師会から献血推進についてのケーブルテレビ出演依頼を受け，１カ月間に30分番組で計22回放映された。さらには高校野球界の名門である仙台育英学園野球部員が不祥事件を起こし，６カ月間にわたり対外試合が禁止された。そこで社会貢献として野球部員61名が献血したことを地元新聞に寄稿したところ，学園を挙げて250名もの高校生が献血に協力し，テレビにも放映された。

私を含む宮城センター全職員のさまざまな取り組みにより，10歳代の献血率は，平成27年度5.3％，

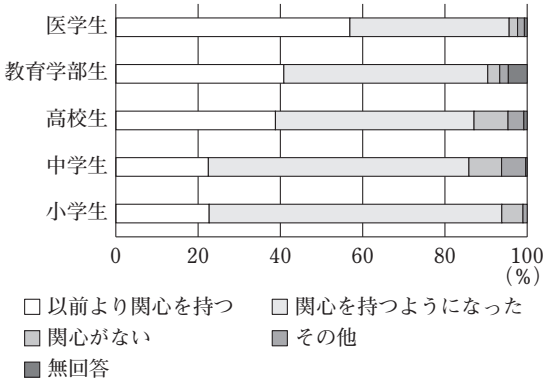
平成28年度6.5％，平成29年度6.8％と増加しつつある。

まとめ

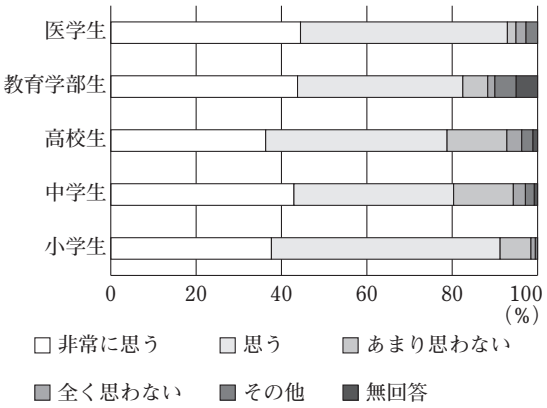
今後も血液を安定供給するためには，将来を担う若年層に対して血液センター所長をはじめとする全職員が，それぞれの立場で積極的に献血推進に取り組む必要がある。



A）献血セミナーの理解



B）献血への関心



C）献血への協力

図3　アンケート調査結果